

大学院リサイタルシリーズ⑤

音で繋がる ヨーロッパの世界

2020年 10月15日(土) 15:00開演(14:40開場)
洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン 1F

⚠ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・ マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・ 大声や対面での会話はお控えください。
- ・ 演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・ 休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・ 客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・ 出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・ 万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

Program

1. 富樫 桃子

J. ブラームス / 《11 のコラール前奏曲》より
第8曲「一輪の薔薇が咲いて」へ長調 作品122

J. S. バッハ = ブゾーニ / 《シャコンヌ》

～休憩～

2. 堀口 納菜子

F. モンポウ / 歌と踊り 第3番

F. ショパン / アンダンテ・スピアナートと華麗なる
大ポロネーズ 作品22

3. 田口 美優

M. ラヴェル / 亡き王女のためのパヴァーヌ

F. ショパン / スケルツォ第2番 変ロ短調 作品31

■ 曲目解説

J.ブラームス(1833-1897)/《11 のコラール前奏曲》より第 8 曲「一輪の薔薇が咲いて」へ 長調 作品 122

1896 年 5 月 2 日にクララ・シューマンが亡くなり、ブラームスはクララを失った悲しみをオルガン曲“コラール前奏曲”を書くことでクララへの追悼、そして、自分を慰めようとした。死の直視、現世との決別、永遠の生命への熟考と言ったものを織り込まれている。ブラームスはこの曲を作曲した翌年、1867 年 4 月 3 日に死去している。

第 8 曲は 11 曲の中で、最も幸福を感じる作品。厳格に 4 声体を守っており、対位法的な手法を使っている。コラール旋律は、最上声部に置かれているが、非和声などで豊かに飾られている。

J.S.バッハ=ブゾーニ/シャコンヌ

J.S.バッハ=ブゾーニ/シャコンヌ 《シャコンヌ(ブゾーニ編)》は、『無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第 2 番 ニ短調 BWV1004』の 5 つの楽章(アルマンド、クーラント、サブバンド、ジーク、シャコンヌ) からなる組曲の一つを編曲したものになる。“シャコンヌ”はかつて舞曲だったが、一般的には一種の変奏曲と見なされている。しかし、バッハはただ変奏を並べたものではなく、演奏効果を踏まえた巧みな設計をもとに構成して作曲している。主に、主題と 30 の変奏曲からなり、大きく 3 つの部分に分けられる。

(主題から 15 変奏) オルガン的な響きがある主題が提示され、段々と精巧化され、頂点に達すると、また主題に近い姿となる。これに変奏が続く。

(16-24 変奏) 第 16 変奏からはニ長調になり、希望と慰めが感じられる。非常にオルガン的で、対位法が進むとますます響きが一層豊かで美しくなる。

(25-最後) 第 25 変奏からは、ニ短調に戻り、一転して静かなものになる。主題に近い姿から始まって、細かい音符の進行に発展し、最後は主題に帰す。

(富樫 桃子)

F.モンポウ(1893-1987)/歌と踊り 第 3 番

全 14 曲からなるこの作品は半世紀の長い期間にわたって書かれた。モンポウの明確なスタイルが表れており、叙情とリズムのコントラストがはっきりしている。今回演奏する第 3 番は 1926 年に作曲され、同年 5 月にリカルド・ビニェスによってバルセロナで初演された。歌はモデレ(モデラート)。調号、拍子は書かれていないが、ニ長調に近く、4 分の 3 拍子である。独創的サルダーナ(サルディーニャ)に先立って出てくる「聖母の御子」は、カタルーニャの最も有名な子守唄歌でクリスマス・キャロルである。踊りはタン・ドゥ・マルシュ。大勢で手をつなぎ、大きな輪をつくってリズムカルに踊るカタルーニャのサルダーナ舞曲

の調子にもとづいている。これは紀元前 3 世紀に始まった踊りで、モンポウの住まいの近くであるバルセロナの教会前の広場で毎週日曜日に踊られていた。調号、拍子は書かれていないが、ト長調に近く、8 分の 6 拍子である。2 拍子の愉快なリズムが絶え間なく続き、強い箇所や柔らかい曲調が出てきて、表情が様々に変化していく魅力的な作品。

F.ショパン(1810-1849)/アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 作品 22

《華麗なる大ポロネーズ》は 1830 年に手がけられ、そこに《アンダンテ・スピアナート》が書き加えられて 1836 年に出版された。本来はピアノとオーケストラによる協奏作品であるが、今日オーケストラ伴奏で演奏されることはあまりなく、ピアノ独奏版が一般的である。“Spianato”はシンプル、巧まない平穏さを意味し、念を押すように *Tranquillo, sempre legato, pp* などを示していることから、優しく穏やかな広がりを持たせる。ポロネーズの前奏としては規模が大きく、左手が奏でる分散和音に乗って、右手の旋律が装飾音に彩られて滑らかに流れていく。途中 3 拍子のマズルカ風な部分が挿入されている。ポロネーズはオーケストラのトゥッティで始まる。ピアノ独奏は華々しい演奏効果を追い、特に右手の装飾音に高度な技巧が要求され、左手がポロネーズのリズムを鮮やかに刻みこんでいく。最後のコーダでは迫力と興奮を増して大きなクライマックスを作る。

(堀口 納菜子)

M.ラヴェル(1875-1937)/亡き王女のためのパヴァーヌ

1899 年にピアノ曲が作曲され、1910 年にラヴェル自身によって管弦楽曲に編曲された。パヴァーヌとは、当時ヨーロッパの宮廷で普及していた非常にゆったりとした踊りの事を指している。日本では“王女”と訳されているが、原題の“infante”はスペインの王女の称号の事である。しかし、この曲はある特定の王女に捧げられて作られたものではなく、スペインにおける風習や情緒を、17 世紀の宮廷画家ディエゴ・ベラスケスが描いた『スペインの王女、マルガリータ王女』の肖像画からインスピレーションを受けて作曲された。

F.ショパン(1810-1849)/スケルツォ第 2 番 変ロ短調 作品 31

スケルツォ第 2 番は 1837 年にパリで作曲された。スケルツォとはイタリア語で『冗談』『ユーモア』を意味し、ショパンのスケルツォの音楽的な特徴としては速いテンポと 4 分の 3 拍子、3 部形式を基本的な構造としており、形式はベートーヴェンから受け継いだ物である。この頃のショパンは、恋人マリア・ヴォジンスカとの恋の終わりであり、ジョルジュ・サンドとの交際が始まりつつある時期であった。この曲のドラマティックな感情の起伏の大きさには、ショパン自身の失恋、恋愛などが影響し、様々な深刻な情緒が表現されている。

(田口 美優)

■Profile

富樫桃子(ピアノ) 洗足学園音楽大学ピアノコース器楽専攻卒業。洗足学園音楽大学大学院ピアノコース 1 年 在籍。第 5 回ダヌビアタレント国際音楽コンクール【D カテゴリー】第 3 位。大学在学中 に、オーディションを経て、学内オーケストラ定期演奏会の鍵盤楽器エキストラとして参加 多数。現在も準演奏補助要員として参加。これまで、田中蒼子、倉戸テル各氏に師事。現在、赤松林太郎氏に師事。

堀口納菜子(ピアノ) 埼玉県出身。東京音楽大学器楽専攻ピアノ科卒業。洗足学園音楽大学大学院ピアノコース 1 年在籍。第 31 回日本クラシック音楽コンクールピアノ部門全国大会入選。第 12 回 東京ピアノコンクール大学部門審査員奨励賞受賞。これまでに数々のコンサートに出演し、毎年クリスマスにソロコンサートを開催。浦和ルーテル教会にてオルガニストとして奉仕。これまでに武田真理、樋口愛、野中千春、藤井祥子の各氏に師事。ソルフェージュを首藤健太郎氏に師事。現在、赤松林太郎氏に師事。

田口美優(ピアノ) 広島県出身。洗足学園音楽大学ピアノコース器楽専攻卒業。洗足学園音楽大学大学院ピアノコース 2 年在籍。第 1 回洗足学園学内コンクール第 3 位。第 77 回福山音楽コンクール本選 ファーストクラス受賞。第 28 回日本クラシック音楽コンクール全国大会入選。2018 年、2019 年度特別選抜演奏者認定。これまでにピアノを浅尾晶子、宮久恵、三谷智子の各師に 師事。現在ピアノを江崎昌子氏に師事。